

『現代文学』によせて

長野 隆

『現代文学』について何か述べよとのことですが、残念ながら今の私にこの雑誌十五年間の歩みを言葉で約めることは困難である。実際、私がこの雑誌の存在を知り、その歩みとともに自己の文学上の観念を育んで行くことのできたのは、初めて寄稿させていただいた昭和五十二年（掲載は翌年）以降のことであるから、その時点で既に創刊後八年を経過していたことになる。その私が今更バックナンバーを繕いて云々したところで、私とはひとまず離れた所で積み上げられてきた過云八年に遡る時の堆積は、容易にその正体を明かさぬであろうし、また明かしたとしても、実践の直中で共に歩んでこられた同人諸兄の心の内側は、恐らく別の呟きを発するにちがひがあるまい。それがこの雑誌の今日に及ぶまでの方向を定める上で最も重要な期間であると感ずれば尚更のことだ。したがって、中途から関りをもたせていただいた私

に問わるべきは、『現代文学』という活動の総体を何か他のイメージに置き換えてみることはできぬかということだ。少し大袈裟な言い方だが、この文芸誌との出会いを私に促した文学的状況の自然なモメントこそ、まさに私にとっての『現代文学』と言ひ得るのではないかと思うのである。

私が大学に進学したころ（昭和四十七年）、現代の文学として最初に意識させられたのは、古井由吉や小川国夫の短編小説であった。特に古井の「杵子」、小川の「生のさ中」などは、理屈ぬきで詩のような衝撃を与えてくれた。彼等がいわゆる「内向の世代」という言葉で括られているのをあとで知ったとき、私もまた内向の世代であると言うに躊躇しなかった。このたわいもない独り言は意識の裏側で念仏のようにくり返されていたために、かなり執拗に私の観念を支配してしまつたようである。そして『反歴史主義の文学』、饗庭

孝男のこの書を手にしたときの厚い手応えのようなのを今も私は記憶している。或る時代の文学にとって最も必要な批評家の存在というものを確認したように思う。私の抱いた文学内面の論理はことごとくそこに明かされたかのようにであった。「現象学的存在論」、したがってこの言葉もまたバカの一つ覚えのように私の中で繰返されることとなる。

当時私の大学の文芸部などでは、西欧の新批評の影響下に、ブーレやブランショ、それにバシュラールなどが廻し読みされていたように思う。七〇年闘争の余韻消えやらぬ中で相変わらず状況と文学を窺する仲間も動いてにはいたが、例えば彼等の標榜する吉本隆明にしても、むしろ我々仲間内では『言語にとって美とは何か』『心的現象論序説』の方へと関心が向けられ、文学に対する原理的なアプローチの仕方が優勢であった。ほどなく吉本自身が『書物の解体学』によって明かすように、事態はまぎれもなく文学方法論全盛の趣を呈していた。そうした一連の文学論隆盛のムードを最も精力的に支えていたのが、審美社、思潮社にイメーシされる仏文系の現代批評家達であった。作品そのものとは言えば、先に触れた作家群はもとより、あの足穂ブームを呼び起し、それを取り巻くように沸き起ったモダニスティックな感覚主義が受け容れられていたようだ。どこか詩と詩論の時代というような印象を私は抱いている。今想えば、それら個々の動きが頭の中でどのように整理されて居坐っていたのか判然としな

いが、ともかく流行は流行として時勢の必然を反映させ、表裏相渉る形で文学の混沌をしきりに糾弾していたように思うのだ。そんな中で、饗庭孝男の思索と表現は際立って冷静な意欲にあふれるものの一つだった。「内向の世代」の批評家などという一過性の呼称は、多分に受け容れ難いものであるに違いないが、氏の方法を印象づけずにはおかぬ時代の文学の要請とあれば仕方のないところだろう。文学史家の悪い洒落に、本人は違った場所で苦笑しているに相違ない。その方法に共感を抱いた私は、まもなく氏の評論を読みあさり、おぼろげな人格的輪郭をつくり上げることとなる。『石と光の思想』の作者は殊に、肉声の存在論のようなのを悲しい美しさで語りつづけていた。私はこれを氏の「孤独の方法」の原点に据えることができた。

私は、学部後半期をむかえた。卒業論文に島尾敏雄を選んでのち、関係諸文献の収集や整理を進めることが楽しい手作業となっていた。季刊『審美』の廃刊を知ったのはそんなときである。森川達也によって編集されたこの雑誌の、どこか他と一線を劃しているような孤独な端正さを忘れることができない。今想えばそんな印象も、その頃の私が引き寄せた、同時代の文学・批評の、依って立つべき一つの顔であったのかと思う。卒論の一部となるものを仲間内の同人誌に載せ、私は恐る恐る二三の人に批判をあおいだ。その折に御返事いただいた島尾敏雄氏御本人のものと饗庭孝男氏のものは今も大

切にしまっている。何しろ初めての経験だった。特に饗庭氏の御批判は厚意にあふれ、たぶん私の方から再び謝辞の手紙を差し上げたと思う。これを機縁に私は饗庭孝男を知り、同時に『現代文学』を知った。したがって私は全く無造作にこの季刊雑誌を、饗庭孝男という批評家のイメージを介して、季刊『審美』にダブらせて眺めていたはずだ。殊更冷静にならずとも両者の個性が異った準位に立つのは明白だが、少なくとも私の裡ではそのように視ようとする傾きが強くあったように思われる。そして、そういう記憶を、私は今も捨てようとは思っていない。

さて、予定された紙数も尽きてしまった。私は『現代文学』について何か語ることができたらうか。もっと直かに内容に立ち入るべきであったか。微力を厭わなければそれも出来ないではなかったが、やはり私ごときの役目ではないと考えた。私はただ、私の学生時代の、とりわけ支配的であった文学上の一記憶を、とりとめもなく綴ったにすぎない。